

存在論的脅威が文化的世界観からの逸脱に及ぼす影響に関する実験的研究

法 弁

本研究では存在脅威管理理論に基づき、集団の死と突然の死の想起が文化的世界観からの逸脱を生じさせる可能性に焦点を当てて検討し、既存の理論を踏まえつつそれを拡張することを目的とした。また、もう一つの目的は、死の顕現化操作における自由記述のテキストデータを調べることによって、死の顕現化操作の妥当性および、その操作の有効性に関わる要因を検討することであった。本研究全体の構造を Fig.1 に示す。

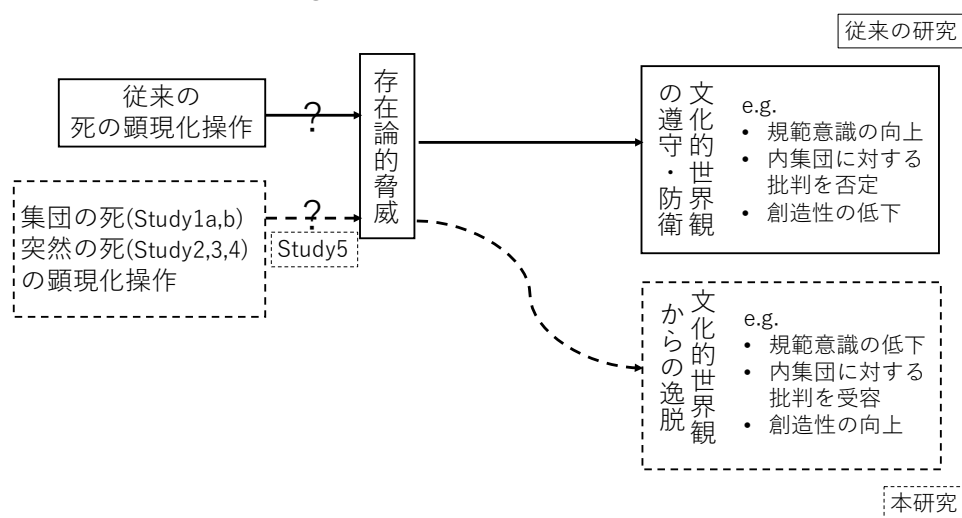


Fig.1 本研究全体の構造

第1章では本研究が根幹とする理論である存在脅威管理理論について先行研究をレビューし、問題点を整理した。我々は高度な認知機能を持つことで、誰もがいずれは死ぬ、つまり、自分の存在が一時的なものに過ぎないという事実を認識することができる。そうであれば、我々の存在には果たしてどんな意味を持つのか。その質問に答を見出せなければ、人は目標を立て意欲的に生きるばかりではなく、生きる気力さえも見失うであろう。そこで、存在の意味と価値を明確にすることで存在論的脅威から身を守るため、我々の祖先は抽象的思考能力を駆使し、「文化」という、現実世界に規範と秩序を与え、時間と空間を超えて存在し続ける信念体系を作り上げた。

存在脅威管理理論によれば、「文化が個人に内在化された信念と価値体系」と定義される文化的世界観は、存在論的脅威を緩和する効果を持つ心理的不安緩衝装置の1つとして機能するとされている。そのため、死の顕現化、すなわち自分自身の死について考える傾向と、文化的世界観の遵守・防衛といったような行動をする傾向が強まると考えられる。これを実証した研究では、死の顕現化の実験的操作を受けた参加者は、寄付や援助といった利他行動のような、文化的世界観の価値基準に満たす行動を積極的に行うことや、文化的世界観の基準からの逸脱者(e.g. 売春を行った者)により多くの罰金を科すこと、すなわち死の顕現化効果が見られることが検証されている。こうすることによって人は自分の価値を確かめ、存在論的脅威を抑える一方、新しい規範や価値基準の変化への受容が低下する可能性がある。ただし、危険な状況から身を守るためには、既存のものから離れて新しい規範と価値基準を受け入れることが必要とされる状況も考えられる。

つまり、存在論的脅威を感じることによって「逸脱」が生じるという、従来とは異なる仮定を検討する必要がある。

そこで、本研究では存在論的脅威が高まる時、1) 文化的世界の基盤となる集団の状況と、2) 人生の残り時間の長短に対する認知が、人が文化的世界観から逸脱するか否かを判断する要因となると予測し、従来の死の顕現化操作方法をもとに新たなバリエーションを加え、集団の死、あるいは、突然死・老衰死を想起させることによってその可能性を検討する(Table.1)。そうすることにより、本研究は存在脅威管理理論の枠組みにおいて、全く検討されてなかった文化的世界観の更新プロセスに新たな知見を提供し、既存理論の拡張に貢献できると考えられる。

Table.1 自由記述による死の顕現化操作

次の文書を読んで、以下の2つの質問について考えて、答えてください	
従来の死条件 (Study1)	自分が死ぬ時を想像すると、
集団の死条件 (e.g. Study1b)	隕石の落下によって、日本は壊滅した。自分を含め、全ての日本人が死ぬ時を想像すると、
突然死条件 (Study2,3,4)	死は不条理なものである。自分が不慮の事故などによる突然の死を迎える時を想像すると、
老衰死条件 (Study2,3)	人はこれから先、高い確率で90歳まで生きられる。自分が寿命で死を迎える時を想像すると、
統制条件 (Study1-4)	歯が痛い時を想像すると、

- 1) どのような気持ちになるますか
- 2) 身体的にどのような状態になると思いますか

また、死の顕現化効果は多くの実証的証拠に支えられてはいるが、その再現性が疑問視されることも少なくない。しかし、再現性を検討する前に、まず、死の顕現化操作は成功しているどうかを判断する基準を明らかにする必要があると考えられる。そこで、本研究では存在脅威に関する研究では初めての試みとして、死の顕現化操作の自由記述データを探索的分析を行うことによって、「死の想起は存在論的脅威を喚起する」との基本仮定を確かめ、死の顕現化操作の妥当性およびその有効性に関わる要因を検討し、存在脅威管理理論の精緻化を目指す。

第2章では集団の死の想起が文化的世界観からの逸脱に与える影響を検討した。文化的世界観は集団成員の間で共有される信念と価値体系であるため、それに従って行動することにより、人は所属集団の他成員から高く評価されることで自尊感情が向上する。また、文化的世界観の価値基準を満たす人には、自分が個人や世代を超えて存続し続ける集団の一部になると感じることで「不死感覚」を得られる。しかし、集団は存続の危機に直面する場合、文化的世界観の遵守による自尊感情と「不死感覚」の獲得が期待できなくなるため、その不安緩衝機能が一時的に失効する可能性が考えられる。したがって、文化的世界観からの逸脱が生じやすくなると予測できる。

そこで、先行研究を参考にし、文化的世界観の基盤となる集団全体の死—「地球の壊滅による全人類の絶滅(Study1a, $N = 143$, 平均年齢は 19.80, $SD = 1.05$)」「日本の壊滅による日本人の絶滅(Study1b, $N = 115$, 平均年齢は 19.36, $SD = 1.09$)」—を想起させる操作を行い、それが人の規範意識と内集団批判者への評価に与える影響を検討した。Study1a, bの結果により、集団が不安定な状況において存在論的脅威が喚起されると、文化的世界観からの逸脱が生じやすくなるとの予測を支持する結果は得られなかった。それに反して、個人の死の想起よりも集団の死の想起後に、文化的世界観への収束傾向がより強くなることが示された。

第3章では突然の死の想起が文化的世界観からの逸脱に与える影響を検討した。社会情動的選

扱理論によれば、人生の残り時間の長短への認知が、人の意思決定と行動に異なる影響を与える可能性を示唆している。このことを踏まえると、自分の残り時間が長いと感じる場合、人は未来志向になり、他者から良い評価を得ることは自分に長期的な利益をもたらすと考えるため、文化的世界観の規範と価値基準を満たす動機づけがさらに高められると考えられる。しかしその一方、自分の残り時間が短いと感じる場合、人は現在志向になり、長期的な展望を持たなくなるため、目の前の利益を得ようと図ったり、短期的な喜びを追い求めたりするようになる。このような傾向は文化的世界観からの逸脱の受容性を高めると考えられる。

上述の可能性を検討するため、老衰死と突然死の想起という新たな死の顕現化操作を行い、それらが内集団批判への態度と規範意識(Study2, $N = 188$, 平均年齢は 18.52, $SD = 0.98$)、および、文化的世界観からの逸脱行為として想定されている創造力の発揮(Study3, $N = 96$, 平均年齢は 19.14, $SD = 1.02$)に与える影響を検討した。Study2,3の結果を踏まえると、突然死の顕現化操作後、文化的世界観からの逸脱が生じやすくなるとの仮説は支持されなかったと考えられる。一方、老衰死の顕現化操作後、大学生参加者は人生の残り時間が長いと認知するため、長期的な利益を求めて文化的世界観の価値基準を満たす動機づけが高まるとの仮説も支持されなかった。

第 4 章では死の顕現化操作が高齢者の罪悪感喚起に与える影響を検討した(Study4, $N = 303$, 平均年齢は 70.89, $SD = 5.50$)。Study2 および 3 では、実験的操作を行うことによって大学生参加者の人生残り時間への認知を変化させようとしたが、ライフサイクルにおける位置によって人生残り時間への認知も変わると考えられる。つまり、若年者に比べ、高齢者は残された時間を短く感じるだろう。そうすると、高齢者は新しい資源・人間関係を獲得する欲求が低くなるにつれ、文化的世界観の価値基準を満たすことの動機づけを失い、逸脱が生じやすくなると考えられる。しかし一方で、先行研究は高齢者が死の顕現化後、若年者と同じように文化的世界観の防衛欲求が高まったと報告している。これらを踏まえると、死との距離が近い高齢者において、文化的世界観の不安緩衝装置としての有効性をより詳しく検討する必要があると考えられる。以上を踏まえて、従来の死の顕現化操作後、高齢参加者の罪悪感が喚起されやすくなるか(仮説 1a)、それとも喚起されにくくなるか(仮説 1b)、について検討を行ったが、死の顕現化操作が罪悪感喚起に影響を及ぼすことを確認できず、仮説 1a, b のどちらも支持されなかった。

第 5 章では Study1~4 で行った死の顕現化操作の際の自由記述データを収集し、探索的分析を行った(Study5)。まず、参加者の自分自身の死に対する考えを、「存在論的脅威(死の不可避性と予測不能性)」、「感情反応(死ぬことに対する感情表出)」、「時間的展望(振り返り、または未来に対する展望)」、「死因と死ぬ過程(死に方や死ぬ時の状態)」、「死後について(死後の世界に関する想像や、残された人・物への関心)」の 5 つのカテゴリに分類することができた。したがって、「死の想起は存在論的脅威を喚起する」との存在脅威管理理論における基本仮定が確認できたと考えられる。ただし、死の顕現化条件によって存在論的脅威の言及率に差が示された。具体的には、突然死(8.92%)と老衰死(12.35%)条件に比べ、従来の死の顕現化条件(25.76%)においてその言及率が有意に高かった。この結果により、本研究で新たに作成した突然死・老衰死の顕現化操作に比べ、従来の死の顕現化操作の妥当性は高いと結論付けられる。

また、死の顕現化条件によって「時間的展望」に関する記述が異なることが示された。従来の死の顕現化条件においては、これからの生き方についての記述が多く見られ、回答者は未来指向になり、人生を展望する傾向が高い。一方、突然死と老衰死の顕現化条件においては、回答者は死ぬ時点に立って「過去」となる人生を振り返ろうとする傾向が高い。後者は、死因が与えられ

ることにより、自分自身の死を具体的に考えられるようになるためだと考えられる。さらに、死を具体的に想像できる場合、予測不可能なはずの「死」が予測可能なものになるため、存在論的脅威を感じなくなり、代わりに、死ぬことがもたらす肉体的苦痛への恐怖感情が喚起されると考えられる。以上のことから、死を具体的に考えられるかどうか死の顕現化操作の有効性に影響を及ぼす可能性が示唆された。

第6章ではStudy1～5で得られた結果に基づいて総合考察を行った。まず、本研究の結果によって、人は危機的状況においても、集団・文化的世界観に背を向けることはない可能性が示唆される。その理由として、逸脱行動を行うことが、他集団成員の自分に対する評価を下げるとともに、他人の協力が得られず集団からの孤立を招く可能性を高めることが挙げられる。それは危機的な状況の克服にとって不利である。そのため、本研究が想定する「文化的世界観からの逸脱」から始まる既存規範と価値基準の更新プロセスを考え直す必要があると考えられる。1つの可能性としては、人は既存の規範や価値基準から逸脱するよりも、集団において形成される新規規範を取り入れることが挙げられる。

また、自由記述の回答による分析の結果から、存在論的脅威が従来の死の顕現化操作によって喚起できることは確認できたが、存在論的脅威の喚起と死の顕現化効果との因果関係についてはまだ不明のままである。メタ分析によってその因果関係を解明することが今後の研究方向の1つとして考えられる。

最後に、本研究の結果により、人は高年齢になると死に対してより受容的な態度を示す一方、存在論的脅威の感知能力は加齢によって衰えないことが明らかになった。そのため、高年齢になっても、不安緩衝装置は機能し続けると考えられる。ただし、先行研究では、存在論的脅威を抑える不安緩衝装置の働き方が加齢によって変化する可能性が指摘されている。身体・認知機能の低下によって、高齢者は社会の規範と価値基準をつねに確認することが困難であるため、文化的世界観の不安緩衝機能が低下すると考えられる。その代わりに、加齢や経験の蓄積によって、高齢者はより高い自尊感情を持ち、それが主な不安緩衝装置として機能することが考えられる。よって、今後の研究方向の1つとして、年齢が不安緩衝装置の働き方に与える影響を検討することが考えられる。(社会心理学)